

「大自然の摂理」に生かされて

上廣哲治

これまで繰り返し述べてまいりましたが、実践倫理の教えは知識や教養にとどまるのではなく、その教えに実践という命を吹き込むことによって、人生の困難や苦難を乗り越える力となり、生きる力を育むことができるものです。実践なくして、教えの真理を理解することはできません。それゆえにわが会では、「教えと実践は車の両輪」といわれるのです。皆さまに、ご自身で実践力を引き出し、高めていただくために、昨年九月号の「家庭愛和」から始めて、先月号の「苦難福門」に至るまで、「仕合わせ」「現実大肯定」「喜働」などと、わが会の主だった十の教えを、生活の場に生かすという視点から、名誉会長の著書『実践倫理講座』を傍らに置き、学び直してきました。毎号、学びの締めくくりはその月の「実践課題」をお示ししたのも、教えを日常実践に役立てていただきたいという思いからでした。

この視点からの学び直しは今月号で一区切りをつけ、次号からは、今という時代を生きるなかで眼前にできわくさまじまな問題から実践課題を取り上げ、教えを学び直していこうと考えております。そこで最後に、実践の根幹をなす「大自然の摂理」をテーマに取り上げることとしました。大自然の摂理は一つの教えではなく、わが会のすべての教えを導き出した根拠となる法則です。わが会の教えはすべて、ここから生まれたものです。

人間が生きる世界は、大きくは宇宙の天体の運行から小さくは物質を構成する素粒子といわれる極小の世界の働きに至るまで、すべて大自然の法則にしたがって活動しています。この世界にある何物をも、それを免れては生きていくことも活動することも、存在することもできません。その極大から極小までの全世界を貫く法則が大自然の摂理です。

私たちが今、こうして生きていられるのも、身体のすべての器官が大自然の摂理にしたがって活動しているからです。「私は自分の意思で生きる。だから心臓を拍動させよう」というわけにはいきません。確かに人間は自らの意思で行動しています。しかし、心臓の拍動一つ自分でコントロールすることはできません。心臓が規則正しく拍動してくれている。だから私たちは生きていくことができます。意思が先にあるのではなく、大自然の法則がまず先にあって、その後から私たちの意思が生まれるのです。これが、大自然の摂理によつて私たちは生かされているということなのです。

人間を含めたすべての生き物は、大自然の摂理にしたがって生きるほかありません。わが会の教えは、この大自然の摂理から導き出された、人間本来に備わった性質にしたがった教えなのです。「朝起き」を奨励するのも、人間は本来、日の出とともに起き、日没とともに眠りにつくように大自然の摂理によつてつくられているからです。それが人間本来の自然なリズムなのです。「利他の実践」を勧めるのは、集団で生きるよう定められた人間は、仲間を助けることに喜びや仕合わせを感じるようつくられているからです。苦しんでいる人を見ると、その苦しみに寄り添い、思わず助けたくなくなってしまふ。喜

んでいる人を見ると、自分まで嬉しくなる。これは生き物としての人間に備わった性質です。「家族愛和」や「夫婦愛和」も、人間が類人猿から進化してホモサピエンスに生まれ変わる過程で家族を形成し、その大切さを身につけて、そこで仕合わせを感じるように生きてきたからです。

わが会のすべての教えは、人間が頭で考え出した「かくあらねばならない」という規範として守らねばならぬ道徳ではなく、「人間はこのように生きるのが自然だ」というように、人間を「かくあらしめた」大自然の摂理から導き出された教えです。自然にしたがう実践だからこそ喜びを感じ、楽しくなり、やがて仕合わせが実現するのです。倫理実践が、仕合わせに至るただ一つの道筋であると申し上げるのはこうした理由からなのです。

ところが現代人は、生かされているという事実を顧みることなく、自らの力で生きていると過信しております。人間は、なぜこのような驕りを抱くようになってしまったのでしょうか。

人間は、他の動物と異なり自らの力で考え、自らの手で自然界には存在しないさまざまな道具を作り出すことができました。その能力によって現代に至る文明を築き上げてきたのです。その力が人間を傲慢にし、いつしか自然を見下すような態度をとらせるようにしたのではないのでしょうか。

しかし、いかに優れた文明も、豊かな文化も、大自然の法則から離れて存在することはできません。原子論を唱えた古代ギリシアの哲学者デモクリトスは、人間はすべてのことを自然から学んだのだと主張します。糸を織って布地に仕上げることはクモから学び、家づくりはツバメから、歌はナイチンゲール（小夜鳴き鳥）から学んだのだ、と。つまり人間が自然に勝る力を持っているのではなく、自然から多くを学んだに過ぎないのだということです。

最近、積極的に自然に学ぼうと、バイオミクリー（生体模倣）の姿勢で技術開発をする研究者が現れています。まったく痛みを感じさせない注射針をご存じでしょうか。赤ちゃんに、その針をつけた注射を打ってもまったく気づかないといいます。蚊のくちばしにヒントを得た針には、ナノメートル（ミリの十億分の一）レベルのギザギザの突起があり、それが痛みを感じさせないのでそうです。ほかにもカタツムリの殻の研究から、水を流すだけで汚れの落ちるタイルが作られ、台所や風呂場に使われているそうです。蜂の巣の形から軽くて強いハニカム構造が生まれたことはよく知られています。

人間は自然から多くを学び、現在の文明を築くようになりました。しかし、現代文明は多くの問題を抱えて行き詰まっているようにも見えます。今こそ自然の力を謙虚に受け容れ、大自然の摂理にかなった生活を送ることを提唱するわが会の出番ではないかと責任を感じております。

『沈黙の春』で、収穫を上げるために農薬で自然環境を破壊させた人間の傲慢さの悲劇を描いたレイチエル・カーソンは晩年、幼い甥ロジャーのために『センス・オブ・ワンダー』という小著を著しました。朝焼けや夕焼け、海や空、風や雨や雲、草花や木々などさまざまな自然に感動できる素直な感受性の大切さを訴えたのです。人知を超えた「自然現象の不思議さに目を見張る感性（センス・オブ・ワンダー）」を育むことで、生きる喜びに通じる小道を見つけられると書きました。この「小道」こそ大自然の摂理にしたがう自然な生き方であり、わが会の実践道でもあるのです。

では今月の実践課題です。朝起会に向かう道すがら、空を見上げ、大自然に向かつて「朝の誓」を唱えてみてください。私たちを生かしてくれる大自然の摂理に感謝の念が湧き、わが会の教えを導き出した大いなる力に心が開かれるはずです。さあ、開かれた心で日々の実践に励みましょう。